

郡史編さんの在り方

—三原郡（現南あわじ市）の例—

菊川兼男

二つの三原郡史の編さん

昭和四十九年（一九七四）三月、私は兵庫県立学校教員（社会科）を定年退職し、翌四月から一年間、兵庫県総務部県史編集室に非常勤嘱託として勤務した。県史編集室で歴史書編さんに関する重要なことを教えられ学習した。そのお蔭で三十五年間に、二つの三原郡史の編さん委員長を委嘱されることになった。

最初の『三原郡史』編さん

昭和四十五年（一九七〇）本州四国連絡橋公団が発足し、淡路島を大きく変動させる鳴門・明石海峡の架橋が見通しできるようになった。三原郡町村会（緑・西淡・三原・南淡町）では、四町が自主合併をして市制を実施するため

の諸活動を開始した。その一環として、昭和四十八年（一九七三）三原郡町村会は、三原郡制百年記念事業として、合併に向かっての郡民意識の高揚を願って『三原郡史』編さん事業を開始した。翌四十九年度初め、四町より編さん委員五名が委嘱され、委員会が組織された。当時、最年少六〇歳の私が委員長に指名された。私と副委員長Y氏が週四日町村会事務所に出勤し、史料の探究、調査、編集業務をすることになった。

この事業の第一段階は、編さんの基本方針を定めることであった。三原郡四町の住民は、過去百年間に、一つのコミュニティを形成してきたこと、換言すれば、三原郡民は、各町民意識を越える郡民意識を育ててきたという認識に立って編さん要項をまとめることにした。この考え方は、後述する『続三原郡史』編さんにも引き継が

れている。

最初の『三原郡史』(A5判、一四一五頁は部門別編成で、総説自然環境、町村合併史など)、政治、産業・経済、社会・福祉、教育、社寺と宗教、各説文化、交流、軍事と兵事など、通史(江戸期末まで)、人物(四〇名)の九編である。執筆者は編さん委員のほか少数精鋭という考えで、淡路地元の研究者五名に委嘱した。編さん開始から五年で発刊された。発行部数三三〇〇冊。

『続三原郡史』編さん

それから二十五年後、平成十五年(二〇〇三)十一月、三原郡四町は平成十七年(二〇〇五)一月十一日をもって平成の大合併をし、南あわじ市として発足した。三原郡域はそのまま南あわじ市域となった。

三原郡町村会は、昭和五十年(一九七五)から平成十七年までの三原郡の歴史、激動の時代の歴史をどのような形で後世に伝えるかを検討して『三原郡史』の続編を編さんすることを選択した。その事業は数年を要するので、新しい南あわじ市に引き継がれるとした。

平成十五年十一月、三原郡町村会より、私を含め六名

の編さん委員が委嘱され、委員会が発足した。委員の年齢構成は六〇歳代四名、七〇歳代一名、八〇歳代一名で、何れも地元の行政職、教育職のOBである。六〇歳未満の現職とちがって職務上の束縛がなく、時間もとりやすい方であり、しかも執筆経験と熱意のある方々であった。

委員長の私は、当局の意向を斟酌して頁数を一〇〇〇頁以内と予定した。『三原郡史』との整合性を勘案して部門別編成の目次案を作成した。総説(詳細な合併史など)、政治と行政、産業と経済、社会福祉と生活環境、教育、文化(埋蔵文化財調査を含む)、各説(国際交流、リゾート、地名の由来と改変など)の七編と今日的話題一〇項目を付録とした。文化編の文化財調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所(旧石器時代から歴史考古学)飛鳥から江戸期まで)に及ぶ郡内六二遺跡の調査報告である。また、郡内一二五の大字地名の由来と改変、一五の大字地名の冠称の由来と改変の一章を設けた。

私に関係者に語った執筆の心構えは次のとおりである。① 本所は『三原郡史』の続編であること。

② 記述は約三十年間の現代史であるから評価は定着していない。読者には生きた証人が多いので、記述の正

確を期し、特に人名の誤植がないように注意すること。

③ 記述は評価評論よりも歴史事実の現状を正確にすることが大切である。考古学に対する考現学として執筆して欲しい。

④ 文章は読み易く、消化不良の文章でなく、達意の文章を心掛けること。

平成二十一年(二〇〇九)三月『続三原郡史』(A5判、九六七頁)が発刊された。翌二十二年三月、私出版冊子「続三原郡史編纂の経過と思い出」(A5判、四四頁)を出版した。執筆者と編集関係者の思い出集である。

(元三原郡史編さん委員長)